
大阪府立千里高等学校

共有と前進のための

SGH研究開発

実践レポート2015



Preface | はじめに

本校は、昭和42年に普通科高校としてスタートし、平成2年に国際教養科2学級を並置しました。平成17年の国際・科学高校への改編を機に、本校は、次の新たな指導法の研究開発に取り組むこととしました。

- ① より多くの生徒が高い水準の国際性と語学力を獲得するための指導法。
- ② 総合科学科における指導法。
- ③ 文・理両方の学力と、それぞれの専門性を高めるための指導法。

そして、これまでの指導法を改良するとともに、スーパーサイエンスハイスクールをはじめ、国・府の研究指定等の活用を図ってまいりました。

平成27年からはスーパーグローバルハイスクールの研究指定をいただくことができました。将来のグローバル・リーダーを育成するため、次の教育課程・指導法を開発することとしました。

- ① 課題研究の研究領域として国連グローバル・コンパクトを取り上げるとともに、ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行える力を育むための教育課程。
- ② 高い社会貢献意識と高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させるための指導法。

本校は、課題研究の質を高めるための手法として、国連グローバル・コンパクトに参画する企業とNGOそれぞれの視点と取組みの比較、及び、日米の比較という枠組みを設定するとともに、課題研究の導入・展開・まとめの各段階において、連携機関より具体的指導・助言をいただくよう工夫しました。また、国内外における研修の質が段階的に向上するよう計画を立てました。

指定1年次におきましては、特にこれまでの1・2年次の課題研究の指導法の質の向上を図るとともに、大学等との効果的な連携の在り方について模索し、工夫改善に努めました。本報告には、それらの記録、及び、本年度の取組みのアウトプット・アウトカムを収めております。多くの皆さま方にご一読いただき、忌憚のないご批判・ご意見をいただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、本校の取組みを支えていただいている運営指導委員の皆さま、課題研究の質の向上のため多大なご支援をいただいている大阪大学及び関西学院大学の先生方と事務局の皆さま、国連日本政府代表部、国連グローバルコンパクトネットワークジャパン、Anti-Defamation League、アジア太平洋人権情報センター(ヒューライツ大阪)、大阪中小企業家同友会の皆さま、そして、Tanya Odomさんに対し、心よりお礼申し上げます。

本校としましては、多くの方々のご批判・ご意見を真摯に受けとめ、生徒が高い志を胸に文・理両方の学力と専門性を高め、時代を切り拓くグローバル・リーダーへと羽ばたいてくれるよう、引き続き全力で取り組んでまいります。

平成28年3月

大阪府立千里高等学校

校長 林 伸一

Contents | 目次

I. 本校の研究開発構想の概要(抜粋)	1
(1) 研究開発構想名	1
(2) 研究開発の目的・目標	1
(3) 研究開発の概要	1
(4) 学校全体の規模	1
(5) 研究開発の内容等	2
(6) 研究開発計画・評価計画	5
(7) 研究開発成果の普及に関する取組	6
(8) 研究開発組織の概要	7
II. 実践報告	9
(1) 1年生対象のSGHプロジェクト 年間指導経過	10
(2) 1年生課題研究「探究基礎」の指導経過	11
(3) 2年生対象のSGHプロジェクト 年間指導経過	13
(4) 1年生対象「国際理解」特別授業・SGH講演会	14
① 「国際理解」特別授業「高校生の日常と国際的な課題のつながり」(1)	
② SGH講演会「企業の社会的責任と国連」そして「国際問題を大学院で研究すること」	
③ 「国際理解」特別授業『高校生の日常と国際的な課題のつながり』(2)	
(5) 1年生対象 夏季フィールドワーク研修「GLOCAL SEMINAR」	17
(6) 1,2年生対象 秋休み企業・大学訪問研修	20
(7) 2年生対象 「探究」中間発表会	21
(8) 2年生対象 「探究」講座への大学院生訪問指導	22
(9) 1,2年生対象 ニューヨーク研修	23

Contents | 目次

(10) 1,2年生対象 学習成果発表会「千里フェスタ」	28
① 「探究」の発表:代表発表・探究プレゼン・探究セッション	
② 口頭発表でのタブレットの活用	
③ 「探究基礎」:ディベートと第3のアイデア	
④ 基調講演とドキュメンタリー映画上映会	
(11) 成果の普及	31
① SGH ホームページ	
② 実践レポート	
③ 論文集	
④ 1年生向け課題研究テキスト	
(12) SGH 運営指導委員会: 助言を中心に	32
① 平成27年度 第1回運営指導委員会	
② 平成27年度 第2回運営指導委員会	
Ⅲ. (資料)国際文化科今年度入学生の教育課程表	36

I. 本校の研究開発構想の概要（抜粋）

(1) 研究開発構想名

グローバル・マネジメント力を備えたリーダーの育成計画

(2) 研究開発の目的・目標

1) 目的:

国際的な課題について、ステークホルダーがWin-Win の関係となるような提案を行う力であるグローバル・マネジメント力を備えたリーダーを育成するための教育課程の研究開発。

2) 目標

生徒に対し、次に掲げるグローバル・マネジメント力を育成することを目標とする。

- ① 高い社会貢献意識
- ② 国際的課題についての多面的な視点と深い理解
- ③ 国際的課題について他者と連携・協調しつつ探究する力
- ④ ステークホルダーがWin-Win の関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行う力
- ⑤ 高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力

(3) 研究開発の概要

- ① 課題研究の研究領域として国連グローバル・コンパクト(以下、GC)の4分野(労働, 環境, 人権, 腐敗防止)を取り上げ, GC参画企業とNGOの取組の比較, 及び, GCの取組に係る日米比較という手法により多面的な視点を育むための指導法を研究開発する。
 - ➡立場や利害が対立する領域を課題研究の対象とする
- ② 国連・大学・企業・NGOと連携し, フィールドワーク等を通じ研究者・実践家の生き方に直接触れることにより, 高い社会貢献意識とGCに係る深い理解を育むとともに, 高いレベルのコミュニケーション力としての英語力を向上させるための効果的な研修計画を研究開発する。
 - ➡国際的課題に取り組む大人の姿に触れる
- ③ 生徒が互いに協力しながら連携機関等より適切に指導・支援を受け, 必要な情報を収集・分析・整理する力を身につけることができる指導法を研究開発する。
 - ➡外部の教育資源の導入と論理的思考を促す指導法の研究
- ④ 上記①～③を通じ, ステークホルダーがWin-Win の関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行える力を生徒に育むための教育課程を研究開発する。
 - ➡3年間で、「知る」、「調べる」、「提案する」へと発展させる学習場面の提供

(4) 学校全体の規模（平成 26 年度現在）

全日制の 課程	第1学年		第2学年		第3学年		計	
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
国際文化科	159	4	161	4	155	4	475	12
総合科学科	160	4	158	4	157	4	475	12
計	319	8	319	8	312	8	950	24

(5) 研究開発の内容等

1) 全体について

A. 現状の分析と課題

本校においては、国際文化科における課題研究の質を向上させ、国際的課題に高い関心をもつ人材育成の裾野を拡大するとともに、グローバル・リーダーを育成することが課題である。そのため、国際文化科における課題研究の領域に国連グローバルコンパクト(GC)4分野を取り入れ、GC課題研究コースを設置する必要がある。また、1・2年次についてはそれぞれの発達段階に応じたテーマを提示すること、3年次については英語で発表・討論するための選択科目を拡大することが必要である。加えて、本校がSSHにより研究開発してきた、課題研究停滞期における指導法を応用することが必要である。

B. 研究開発の仮説

仮説1. 国際文化科の生徒を対象とする。課題研究が本格化する2年次以降については、GCに係る課題研究のコースを設置し、同コースを指導する教員チームを組織することが必要である。また、生徒の主体性を育みつつ、発達段階に応じたテーマを示す。それにより、グローバルな課題に対する高い関心と深い理解をもつ人材育成の裾野の拡大とグローバル・リーダーの育成を共に達成することができる。

仮説2. GCに関わるステークホルダーそれぞれの利害関心について学び、企業とNGO、及び、日・米の取組について生徒が比較対照するとともに、地域の企業家等の支援を受け、実生活との関わりの中で課題研究を行う仕組みをつくる必要がある。それにより、現実に即した、柔軟かつ創造的な提案を行えるようになる。

仮説3. GCやグローバルな課題に取り組む人たちと直接触れあう機会や見学・実習を多く取り入れることが必要である。特に、中間発表会後の研究停滞期にそうすることにより、生徒はモチベーションを維持するとともに進路や生き方について思索を深める。

仮説4. 互いに切磋琢磨するようなリーダー層を育て、他の生徒を牽引する仕組みをつくる必要がある。そのことにより、優れた意欲・能力を有する生徒を育成・支援することができるようになる。

2) 課題研究について

A. 研究領域

GCの4分野である「人権」「労働」「環境」「腐敗防止」を設定する。この研究領域は、本校がすでに国際文化科の課題研究において多くの生徒が取り上げてきたものである。この領域を明示することにより、生徒がこれまで以上に具体的にテーマを設定することができ、研究の質が向上すると考えている。

B. 連携機関、及び、連携の内容

○課題研究においては、次の機関等と連携する。

- ・国際連合日本代表部(以下、国連)
- ・大阪大学国際公共政策研究科(以下、阪大)
- ・関西学院大学「国連ユースボランティア」派遣日本訓練センター(以下、関学)
- ・グローバル・コンパクト・ジャパン・ネットワーク(以下、GCジャパン)
- ・アジア・太平洋人権情報センター(以下、ヒューライツ大阪)
- ・大阪府中小企業家同友会北ブロック(以下、同友会)
- ・Anti-Defamation League(反中傷同盟。以下、ADL) (これらの機関等を総称し以下、大学等)

○連携の内容については、次の通りである。

- ・国連…本校5期生の沼田隆一氏(元国連開発計画勤務)と連携し、ニューヨーク研修時に、日本代表部より国際的な課題、及び、GCについてご講義いただく。
- ・阪大…蓮生郁代准教授にご協力いただき、年度末に実施する課題研究発表大会においてご指導・ご助言いただく。また、同研究科が主催する次の行事等についてご案内いただき、本校生に参加させる。
 - ① 国際的課題に係る講演会
 - ② サマーキャンプ(全国高校生を対象とした国際的課題についての宿泊研修会)
 - ③ 高校生を対象とした国際公共政策学会、等
- ・関学…同大学「国連ユースボランティア」派遣日本訓練センターと連携し、開発途上国等においてボランティアに取り組んだ学生によるご講演、及び、本校生の課題研究へのご指導・ご助言をいただく。実施時期については、中間発表会以後の課題研究の展開・発展期とする。
- ・GCジャパン…同事務局を通じ、団体として本校生の課題研究に対しご指導・ご助言いただくことについてご承認いただいている。複数の企業のご担当者より、それぞれの具体の活動についてのご講義、及び、課題研究中間発表会におけるご指導・ご助言をいただく。
- ・ヒューライツ大阪…ジェファーソン・プランティア氏(主任研究員)と連携し、本校1年生対象に、約5日間の研修会(日帰り)を実施することとしている。テーマは、GCの意義、市民の立場からGCに期待するもの、及び、優れた企業の取組についての紹介である。また、中間発表会において指導と評価もしていただく。
- ・同友会…同北ブロック事務局を通じ、中間発表会以後の課題研究の展開・発展期において、本校生による企業訪問受け入れ・フィールドワークと、インタビュー等に対するご指導をいただく。
- ・ADL…ニューヨーク研修時に、多面的な視点をもつことの意義、課題研究チーム等集団内の協力関係を高めるためのスキル等について、参加体験型学習によりご指導いただく。また、ニューヨーク研修においては、ターニャ・オダム氏(Global Diversity and Inclusion and Education Consultant and Executive Coach)と連携し、生徒が、GCや企業の社会的責任(CSR)推進に取り組む米国企業を訪問し、フィールドワークやインタビュー等を行えるよう企画する。

C. 各学年の課題研究

【1年次】

・課題研究の目的

- ① 課題設定から論文作成までの指導法の研究開発。
- ② 国際文化科の生徒160名全員の、グローバルな課題と、GC、及び、研究領域に対する知識・関心を向上させること。
- ③ グローバルな課題とGCについて高い関心をもち、課題研究において優れた意欲・能力を有する生徒を育成すること。

・仮説との関係と期待される成果

- ① 生徒の自発性を育みつつ、1年次の発達段階に応じたテーマを設定することにより、限られた時間内に質の高い調査研究が行えるようになる。また、課題設定から論文作成までの知識・スキルが向上するため、課題研究の質が向上する。
- ② 企業の取組とNGOの取組を比較対照させることにより、課題研究の質が向上する。

- ③ 1年生全員がグローバルな課題とGCについての基礎知識を獲得するため、グローバルな課題に対する高い関心と深い理解をもつ人材育成の裾野が拡大する。
- ④ GC課題研究コースを設置し、同テーマに対し意欲関心のある生徒を集めることにより、将来のグローバル・リーダーを育成・支援することができるようになる。
- ⑤ 中間発表以後、研究停滞期において、同友会等関係者へのインタビューを行わせることにより、生徒のモチベーションを維持させることができる。また、リーダーとしての自覚が高まり、将来のグローバル・リーダーとして成長する契機となる。

【2年次】

・課題研究の目的

- ① 課題研究と発表の質を高めるための指導法の研究開発。
- ② GC課題研究コース生徒のテーマについての理解をさらに深めるとともに、大学等関係者と連携し、情報収集や先行研究について調査したり、チームをうまくとりまとめたりするなど、マネジメント力を含む課題研究のスキルアップを図ること。
- ③ 特に高い関心をもつ生徒をリーダーとして育成・支援すること。

・仮説との関係と期待される成果

- ① 生徒の自発性を育みつつ、1年次より難易度の高いテーマを設定することにより、生徒のモチベーションが高まるとともに、限られた時間内に質の高い調査研究が行えるようになり、課題研究の質が向上する。
- ② 企業の取組とNGOの取組に加え、日米の取組を比較対照させることにより、課題研究の質が向上する。
- ③ GC課題研究コース・リーダーを中心に、国連本部、ADL等における研修を実施することにより、リーダー間の連帯感が強まり、課題研究に対するモチベーションがさらに向上する。
- ④ 中間発表会以後、研究停滞期において、同友会等関係者へのインタビューを行わせることにより、生徒は、進路や生き方についての思索を深めるとともに、課題を実生活との関わりの中で探究できるようになる。
- ⑤ 3月に、GC課題研究コースの優秀チームをADL等に派遣し、インタビュー等を行わせることにより、グローバルに活躍したいというモチベーションをより高めることができる。

【3年次】

・課題研究の目的

- ① 3年次の選択科目として、平成28年度に「グローバル・スタディーズ」を新設するとともに、生徒が課題研究の内容について英語により発信・提案し、討論する力を育むこと。なお、指導教員はGC課題研究コース選択生徒に対し、同科目、あるいは、既存の「トピック・スタディーズ」を選択することを促すこととする。
- ② ADLと連携し、米国において発表・提案、討論する機会を設けるよう努め、生徒が海外の志を同じくする企業・団体関係者とネットワークを築くことができるようにすること。
- ③ 阪大の国際公共政策学会をはじめとする研究発表会、GC等が主催する研究会等に参加するよう努めるとともに、全国の志を同じくする企業・団体関係者とネットワークを築くことができるようにすること。
- ④ TOEFL受検者を40名以上とし、海外大学へのダイレクト進学者を複数名出すこと。

・仮説との関係と期待される成果

- ① 3年次の選択科目の中に、「グローバル・スタディーズ(GS)」(2単位)を新設する。目標は、国際的

な課題をテーマとして取り上げ、高度な英語によるコミュニケーション力を育成することである。本校にはすでに、同じ指導法を用いている選択科目「トピック・スタディーズ(TS)」(2単位)があり、例年20~40名が選択している。今回、GSを新設することにより、グローバルに活躍することを目標とする生徒層が拡大する。

- ② 「GS」と「TS」といった授業において、GC課題研究コースのテーマを取り上げることにより、同テーマについての思索が深まるとともに、発表・討論等を行うために必要な高度な英語力を習得できる。

3) 課題研究以外の取組

A. 学校設定科目「グローバル・スタディーズ」の新設

3年次の選択科目として、平成28年度に「グローバル・スタディーズ(GS)」を新設し、国際的な課題やGC課題研究コースのテーマについて、高度な英語によりプレゼンテーションや討論を行える力を育成する。また、TOEFL iBT等を活用した指導を行う。

B. 「トピック・スタディーズ」でGC等をテーマとすること

3年次選択科目「トピック・スタディーズ」の指導項目の中に、国際的な課題とGC課題研究コースのテーマを基にした、英語によるプレゼンテーションや討論を取り入れる。

C. ICT機器等を活用した反転授業と教科指導

1年次「英語文法」・2年次「英語ライティング」において1年間の授業映像を製作し、反転授業を実施。英語・国語・地歴公民・理科等においてICT機器・視聴覚機器を効果的に活用する。

D. グローバル・リーダー育成に関する環境整備, 教育課程課外の取組内容・実施方法

・全員対象海外研修旅行の実施

引続き、国際文化科の全生徒(160名)に、2年次、オーストラリアにおいて、5日間のホームステイを軸とした研修旅行を実施する。

・国際理解講座の開催

1・2年次に、国際文化科の生徒全員を対象に、JICA職員等を招き、国際理解講座を行う。平成26年度については、ハワイ大学教授を招き、講演会を実施した。今後引き続き、外部講師による研究会等を実施する。

・海外の高校生との交流

長・短期留学生を積極的に受け入れる。(毎年30名以上)ハイスクール・ディプロマッツ交流(全米選抜生徒との交流)、大阪府カリフォルニア友好交流(日本語を学習している生徒との相互交流)、日仏高校生交流(フランスの日本語・日本文化を学習している生徒との相互交流)等、海外高校生との交流と討論会を実施する。今後、以上の取組を継続する。

(6) 研究開発計画・評価計画

1) 第一年次(2015年度)

A. 研究開発計画

① 課題設定から論文作成までの指導法の研究開発

- a. 「探究基礎」の教育課程における導入部分(「気づき」「課題設定」「調査計画」)について平成25年度開発したものを改善するとともに、後半の指導法について検討し、策定する。
- b. 「探究基礎」及び「探究」の教育課程におけるGC課題研究コースに係る指導・支援方法について検討し、策定する。

- c. GC課題研究コース選択生徒が80名以上となるような働きかけ方について研究する。
- d. 中間発表会以後の「停滞期」における指導法について研究開発する。
 - ②大学等との連携計画についての相談と調整
- e.大学等との連携について、関係機関と調整し、年間計画を作成する。
- f.グローバル課題・GCについて、指導教員対象の研修を実施する。
- g.GC課題研究コースに意欲・関心を有する1年生約10名によるニューヨーク研修を実施するとともに、現地において国連・ADL等と研修内容について協議する。
- ② 「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法の研究開発
 - ・「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法を研究開発する。
- ③ 国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組
 - ・国際文化科の海外研修が質の高いものとなるよう計画する。
- ④ 「探究基礎」に係る実践等の英語版報告を作成し、学校ホームページにアップロードする。

B. 評価計画

- ① 課題設定から論文作成までの指導法の研究開発
 - a. 「探究基礎」「探究」の教育課程、及び、GC課題研究コースに係る指導・支援方法、中間発表以後の「停滞期」における指導法が策定できたかどうかにより評価する。（「探究」については、平成27～28年度の2年間で開発する。）
 - b. GC課題研究コース・リーダーを発掘できたかどうかについて、指導教員による観察等により評価する。
- ② 大学等との連携計画についての相談と調整
 - ・ 大学等との連携計画について策定できたかどうかにより評価する。
- ③ 「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法の研究開発
 - ・ 「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法を開発できたかどうかにより評価する。（平成27～28年度の2年間で開発する。）
- ④ 国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組
 - ・ 国際文化科の2年次の海外研修が高い質となるよう計画されたかどうかにより評価。
- ⑤ 「探究基礎」に係る実践等の英語版報告を作成し、学校ホームページにアップロードする。
 - ・ 「探究基礎」に係る実践を中心とした英語版報告が作成され、学校ホームページにアップロードされたかどうかにより評価する。

(7) 研究開発成果の普及に関する取組

全国のSGH校によるSGH生徒研究発表会へ参加し、口頭発表を行う。また、府内の高校及び全国SGH校を対象に、本校の取組の実践報告会を開催し、本校が開発研究した「探究力を育成する指導法・教材集」「コミュニケーション・ツールとしての英語力を高める指導法・教材集」を作成し配布する。また、研修旅行等の成果を検証し報告書を作成し、配布する。それらについて、本校ホームページにおいて情報提供する。

(8) 研究開発組織の概要 (経理等の事務処理体制も含む)

1) SGH運営指導委員会

SGH研究開発事業の運営に関し、専門的見地から指導、助言に当たる。学校教育に専門的知識を有する者、学識経験者、関係行政機関の職員等、第三者によって組織する。

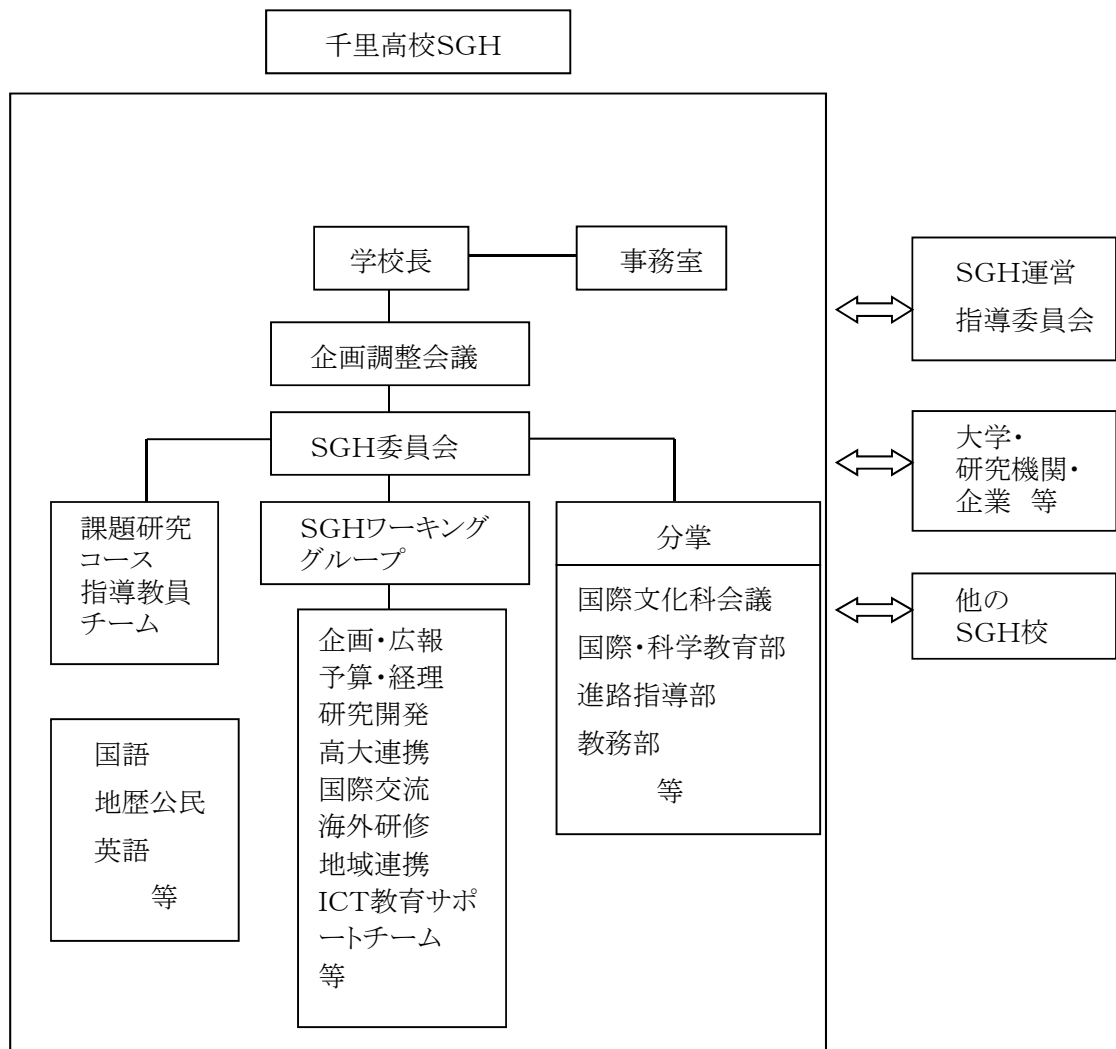
2) SGH委員会

SGH研究開発事業全般について、企画、運営、実施、研究開発、予算編成等を担当する。ワーキンググループを設け、各業務に当たる。

3) 課題研究コース指導教員チーム

GC課題研究コース、及び、その他の課題研究を指導する教員により構成する。指導法・評価検証方法を検討・作成・共有し、課題研究の推進役を担う。

組織図



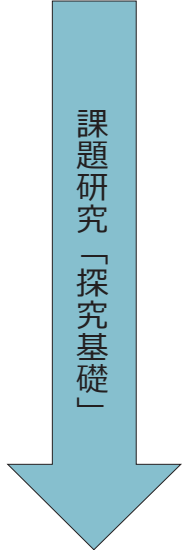
II. 实践報告

(1) 1年生対象のSGHプロジェクト 年間指導経過

1年生向けには、10月の課題研究「探究基礎」開講までの事前準備として、学校設定科目「国際理解」の特別授業、進路を考えるLHR講演会、夏休みを利用したフィールドワーク研修、秋休みを利用した企業・大学訪問研修を行った。

そして、これらを受けた「探究基礎」の授業において、正確に文章を読み取ること、根拠を明らかにして意見を述べること、多角的に検討を加えること、賛成反対の両論を止揚する解決策を考へ出すことを、グループワークを多く取り入れてトレーニングした。

6月	<ul style="list-style-type: none"> ○「国際理解」特別授業:「高校生の日常と国際的な課題のつながり(1)」 パームオイルと熱帯雨林の伐採、カカオと児童労働について 講師:松岡秀紀氏(一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター特任研究員)
7月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 講演会:「企業の社会的責任と国連」そして「国際問題を大学院で研究すること」 講師:猪口絢子氏(大阪大学大学院 国際公共政策研究科 1年生)
8月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 夏期フィールドワーク研修「国際×地元:Global×Local フィールドワークに行こう!」 とよなか国際交流協会にて「国際協力・国際交流と地域社会」「イスラムについて」の研修/茨木市豊川のモスクとコリア国際学園の見学とお話/英語で「国際人権」を学ぶ/ふりかえりワークショップ「国際的な活動でリーダーに求められる力は何だろう?」
9月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校設定科目「国際理解」特別授業:「高校生の日常と国際的な課題のつながり(2)」 大阪での公害問題と住民運動の歴史を学習し、ロールプレイで多様な立場を実感する 講師:栗本知子氏(公益財団法人公害地域再生センター 研究員) ○ ニューヨーク研修募集・選考
10月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 秋休み企業・大学訪問「『現場』を知ろう。最前線で働く人の話を聞こう。」 人権・環境・労働に取り組む企業と関西学院大学を訪問して現場の話を聞く ○ 課題研究「探究基礎」開講 ○ 「探究」中間発表に合わせ2年生のレポートを読んでコメントをフィードバック
11月	
12月	
1月	<ul style="list-style-type: none"> ○ ニューヨーク研修 グローバルリーダーに必要な Diversity&Inclusion の研修と UNGC 訪問等
2月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 特別講演「世界が求めるあなたの力」 村田俊一氏(関西学院大学総合政策学部教授) ○ 児童労働の実情と解決への取組を知るドキュメンタリー映画による学習 ○ 学年末発表会で「探究基礎」の学習成果をディベートと掲示により発表 ○ 学年末発表会で2年生の研究を見学



(2) 1年生課題研究「探究基礎」の指導経過

- 1年生向け課題研究「探究基礎」は、1クラスを20人ずつに分けた少人数の講座で、後期スタートの週に2コマの授業です。前期の間に特別授業や講演会、フィールドワーク、企業訪問などを行い、それらの経験を受けて、グループワークを中心に、論理的思考、多角的検討のトレーニングを行いました。
- ここでは、この講座の流れをガイドするのに用いたワークシート「探究基礎通信」のタイトル一覧と第1回の最初のページを紹介します。タイトルをご覧いただければ、半年間の授業の流れをおおよそつかんで頂けると思います。(すべての内容は、本校SGHのサイトにて公開します。)

<ワークシート「探究基礎通信」のタイトル>

- 1 何を学ぶのか ～ 国連グローバルコンパクト
- 2 どのように学ぶのか ～ 課題の設定から解決へ
- 3 読解力を身につける ～ 文章の読み取り
- 4 読解力を身につける ～ 表・グラフの読み取り
- 5 チームで考える ～ ディベートとはどのような取り組みか
- 6A チームで考える ～ ディベート対戦に向けて1個人活動
- 6B チームで考える ～ ディベート対戦に向けて2 班活動
- 7 チームで考える ～ ディベート対戦に向けての立論原稿作り
- 8 チームで考える ～ ディベート 第3のアイデアとは
- 9 ディベート対戦 ～ 評価 第3のアイデア構築
- 10 課題の発見 ～ 課題はどのように設定するのか
- 11 課題の解決へ向けて ～ アイデアの構築
- 12 課題の解決へ向けて ～ 根拠を明らかにする
- 13 課題の解決へ向けて ～ プレゼンテーション

探究基礎通信 ■ 1 何を学ぶのか ～ 国連グローバルコンパクト

国際文化科では1年生後期に「探究基礎」そして2年生では「探究」の授業があります。この授業の特色を二つの視点から紹介します。

1 何に取り組むか

本校は今年度、文部科学省からスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受けました。大阪府の公立高校では他に5校が指定を受けています。以下は文部科学省のSGHに関するWEBサイトからの引用です。(www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sgh/)

1. 目的：急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する。
2. 事業概要：国際化を進める国内の大学のほか、企業、国際機関等と連携して、グローバルな社会課題を発見・解決し、様々な国際舞台で活躍できる人材の育成に取り組む高等学校等を「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」に指定し、質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を進める。

Q1 「グローバル化」とは何でしょう。調べましょう。

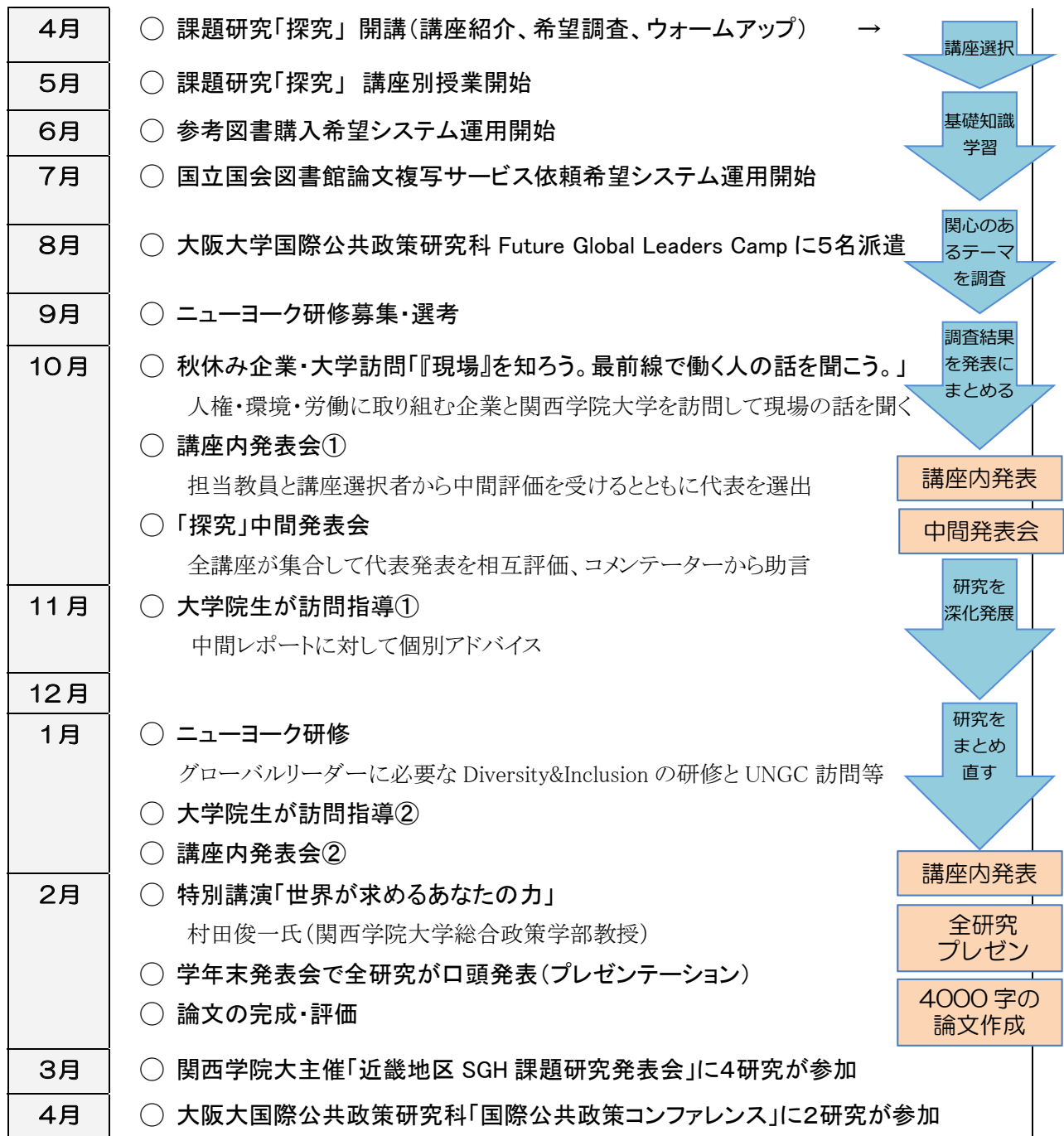
「国家」対「国家」という概念ではないところに「インターナショナル」との違いがあります。グローバルな課題の一例として日本でも大量に消費されている「パーム油」や「カカオ」の問題がありました。

中国で大気汚染物質PM2.5が発生し、それが日本にも飛来しています。石炭の燃焼や自動車排気などが主な原因とされ、日本は中国の被害者のようにとらえるむきもあります。しかしこれを国家対国家の問題ととらえていては解決には向かいません。身につける衣料に一切中国製品がないという人はいるでしょうか。大気汚染を引き起こす産業活動のおかげで我々は手ごろな値段の製品を手に入れることができているのです。安価な製品と大気汚染は直接間接につながっているのです。中国に対し「何とかしろ」と他人ぶって批判するのではなく、自分とつながった課題としてとらえなければならないのです。これがグローバルな視点です。

(3) 2年生対象のSGHプロジェクト 年間指導経過

従来の課題研究に対して、開講講座のテーマに<人権・労働・環境>を加えたほか、研究を課題解決型とするように指導した。

また、研究支援の試みとして、テーマに関連した取組をしている企業を訪問したり、中間発表として研究途上の時期に優れた研究を全員で聞いたり、その発表に対する大学の研究者や企業のCSR担当者のコメントを聞いたり、あるいは大学院生から研究の進め方について個別に指導を受けたりする機会を設けた。さらに、できる限り研究に必要な図書と論文を入手できるようにした。



(4) 1年生対象 「国際理解」特別授業・SGH 講演会

① 「国際理解」特別授業『高校生の日常と国際的な課題のつながり』(1)

■講師 松岡秀紀氏（一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター特任研究員）



■実施日 6月11日、17日

■形態 国際文化科1年生全クラス対象に、「国際理解」の授業で、クラス単位で各1時間

■ねらい 日本の高校生の日常生活が国際的な課題とつながっていることを知る。

このような課題の解決のためにNGO・企業・国際的な枠組みによる取組があることを知る。

■生徒たちの感想

- ・1億6800万人以上もの子ども達が労働を強いられているとは知りませんでした。私は将来そういう子供たちを救う活動をしたいと思います。
- ・児童労働は子供から学習の機会を奪ってしまうのでよくないことだと思いました。
- ・ACEという団体は初めて知った。このように世界的な問題を世界的に解決する必要があると思う。
- ・パーム油の生産過程で現地の人々の大切な森林が壊されてアブラヤシが植えられていると知りました。誰かの生活のために、誰かの生活が犠牲になることはおかしんじゃないかと私は思いました。
- ・企業もいろいろなことを考えてものを作っているんだと実感した。紹介された以外にも、どんな企業がそんな取り組みをしているのか気になる。

■取組を終えて

- ・生徒の身近にある製品と国際的な課題の関わりがあることを紹介していただいた。また、森永製菓とNGOのACEが行っていた「1チョコ for 1スマイル」の取組を紹介していただいた。
- ・生徒が考えて答える時間を作ったり、インターネット上のビデオを使ったりして生徒の実感と現場の様子をつなぐ授業だった。
- ・この授業の内容は、2年生の「探究」の授業の導入にも活用させていただいた。

② SGH 講演会 「企業の社会的責任と国連」そして「国際問題を大学院で研究すること」

■ 講師 猪口絢子氏（大阪大学国際公共政策研究科大学院生）



■ 実施日 7月9日

■ 形態 LHR を使い、4クラス一斉に1時間

■ ねらい 企業活動がグローバル化し、サプライチェーンの「川上」での活動について責任が問われるようになっている現状を知る。

企業の自主的な取組を尊重しながらこの問題に対応しようとする国連グローバルコンパクトの意義と制約を知る。

進路の一つとして「国際問題の研究者」について知る。

■ 生徒たちの感想

- ・ 強制労働や児童労働その他さまざまな問題をきちんと考えている会社の製品を選ぶなど小さな事は私たちにでもできるなと思いました。でも、私はもっと様々な問題に大きく貢献したいです。
- ・ このような問題をなくすためにグローバルコンパクトや CSR が考えられていて、私は単純になるほどと思いました。猪口さんはさらにそれにどんなメリット・デメリットがあるのか、これで本当に合理的なのかなどまで考えられていてさすが、大学院生だと思いました。大学に行ったら自分の興味のあることが深く学べるので楽しみです。
- ・ 世界のどの国どの地域にもきちんと目を向けてその問題と向き合っている社会になる必要があると思ったし、私もそんな人になりたいと思った。

■ 取組を終えて

- ・ 企業の社会的責任と国連グローバルコンパクトの設立の経過・意義・限界について簡潔に分かりやすく、紹介していただいた。
- ・ ご自身の研究についても紹介していただくようお願いし、コンゴ民主共和国における紛争鉱物について詳しくお話しいただいた。教科書でもマスコミでも取り上げられない深刻な現実を生徒たちは重く受け止めていた。
- ・ 講演の後、国際公共政策を学ぶことにした経緯や、大学院生の生活や今後の計画などをお聞きする時間を作った。年齢が近いこともあり、目標としたいと考える生徒も多く見られた。

③ 「国際理解」特別授業 『高校生の日常と国際的な課題のつながり』(2)

■講師 栗本知子氏（公益財団法人公害地域再生センター 研究員）



■実施日 9月10日, 16日

■形態 国際文化科1年生全クラス対象に, 「国際理解」の授業で, クラス単位で各1時間

■ねらい

- ・環境問題を理解する導入として, 地元の大阪での公害問題と現在までの経緯を学習する。
- ・問題の解決には多様な立場の調整が必要なことを大阪の事例を用いたロールプレイを通じて理解する。

■生徒たちの感想

- ・私は工場経営者として議論しましたが, 1か月操業を止めてほしいという気持ちもわかるが, 一方的な意見にも聞こえ, こちらがわの意見もわかってほしいと思いました。これはどの役割になったとしても思うことだと思います。お互いの意見をきちんと理解することが大事だと思います。
- ・なるべくみんなが納得するような対策にしようと考えたときには, 国や府などの自治体, 政府の力が必要不可欠だと思います。
- ・解決に必要な新しいアイデアや発想が自分に足りないと思いましたこれらを補うためには, いろいろな人々と意見を交わし, たくさんの考え方や価値観に触れ, その問題の背景や経緯を理解する理解力や知識が必要だと思います。
- ・大気汚染が起きたら, その原因になっている工場を止めればよいと思っていましたがロールプレイを通して, 工場を経営している側や働いている人にも生活があるので, 工場を簡単にとめることはできないということに気づきました。

■取組を終えて

- ・多様な立場から問題を見ることを知るといふ目的は, 生徒の感想から, 果たせたと考える。
- ・当初から予想していたが, 1時間では, 問題の難しさを理解するところまでになる。解決までの道のりにについても簡潔に要点を押さえていただいたが, この点は今後の各自の研究に委ねることになる。

(5) 1年生対象 夏季フィールドワーク研修「Glocal Seminar」

■実施日 8月4日, 5日, 6日の3日間

■形態 国際文化科1年生の希望者対象, 原則として3日間参加する。後日クラスで報告する。

■ねらい

- ・国際的な課題が地元大阪にも形を変えて存在する。国際協力・宗教・「外国人」の教育について現場を訪れてお話を聞いて理解を深める。
- ・国際人権について英語で考える経験をする。
- ・研修全体を振り返り、グローバルリーダーにとって必要なことは何かを考える。

ー1日目ー

■会場 豊中国際交流センター



① 全体プログラムの紹介、参加者の交流

■ファシリテーター 朴君愛氏(アジア・太平洋人権情報センター上席研究員)

② とよなか国際交流協会の紹介

■講師 山本愛氏(とよなか国際交流協会職員)

■内容 とよなか国際交流協会の設立目的・重点事業、在日外国人の現状、ネパールへの国際協力とネパールのNGO活動について紹介していただいた。

③ 「イスラム社会入門」

■講師 山根絵美氏(大阪大学人間科学研究科大学院)

■内容 イスラム教についての基本知識や急増するイスラム教徒と日本社会の相互理解のための取組みについてお話しいただいた。

④ 明日のフィールドワークに向けての事前学習

■講師 林伸一(千里高校校長)

⑤ 1日の振り返り

■ファシリテーター 朴君愛氏(アジア・太平洋人権情報センター上席研究員)

－ 2日目 －



① イスラム教の成り立ちと茨木市豊川の地域共生の取組を学ぶ

■会場 茨木市立豊川いのち愛ゆめセンター

■講師 北口学氏(大阪芸術大学教員)

■内容 イスラム教がシルクロードを使った行商とともに広がったこと、商売をするにあたって平和的であることが重要であったことなど。

② イマーム(モスクの指導者)によるイスラム教紹介とモスクの見学

■会場 大阪茨木モスク

■講師 大阪茨木モスクイマーム

■内容 イスラム教が大切にしていることやコーランのこと、1日5回のお祈りについてなど。

③ 国境をまたいで活躍する「越境人」をめざすコリア国際学園の理念と地域共生の取組を学ぶ

■会場 コリア国際学園

■講師 宋悟氏 (コリア国際学園事務局長)

■内容 コリア国際学園設立の理念と地域共生の取り組みについてお話しいただき、「越境人」の育成の一例として、領土問題を取り上げた授業の様子をビデオで紹介していただいた。

④ 「1日の振り返り」

■会場 コリア国際学園

■ファシリテーター 朴君愛氏(アジア・太平洋人権情報センター上席研究員)

— 3日目 —

① 国際人権基準の考え方について英語で学ぶ

■会場 豊中国際交流センター

■講師 ジェファーソン・R・プランティリア氏(アジア・太平洋人権情報センター主席研究員)

■内容 "What do you do everyday? What do you want to do in the future? All of these are human rights." -ワークショップ形式で国際人権について英語で聞き、考え、発表しました。



② 研修のまとめと3日間の振り返り

■会場 千里高校 社会科教室

■講師 朴君愛氏(アジア・太平洋人権情報センター上席研究員)

■内容 「全ての人に全ての人権を」という Human Rights Day の精神についての話の後、グループワーク「グローバル社会のリーダーに求められる力を3つグループで書いて下さい」で研修全体を振り返りました。



③ 研修レポートづくり

■会場 千里高校 第1 CAL 教室

■指導 大西千尋 (千里高校教員)

■内容 グループで分担して各研修のレポートを作成。このレポートを用いて各クラスで報告をしました。



■生徒たちの感想

- ・今まで抱いていた疑問(イスラム教とISILの関連性など)が解け、さらにたくさんの疑問が自分のなかで生まれた。また、毎日の研修終わりにその日に学んだことを振り返り、それをみんなと意見交流することで新たな視点を持つことができ、とても刺激的だった。
- ・勉強になることが多かった。来年は討論などをもっと取り入れれば良かった。
- ・特にコリア国際学園での授業がよかった。同い年の在日韓国人の生徒が堂々と自分の意見を発表している授業の風景を見て私たちがあんな風にディベートできたらいいなと思った。また日韓関係についても、しっかりと自分の意見でより良い日韓関係にできるように一生懸命考えている姿は本当に感動した。
- ・三日間を通して、メディアから受けとる情報からはわからない事を学べました。実際に直接話を聞く事は大切だという事を学びました。来年度への提案は、様々な視点からの意見を聞ける機会があればいいんじゃないかと思いました。

■取組を終えて

- ・実際に現場に行き本人からお話を聞くインパクトは大きい。
- ・テーマの一つにイスラム教を取り上げたのは良かった。偏見を持ちやすい現在の社会状況があり、その一方でイスラム教信者が日本でも増えている状況があるからだ。
- ・「振り返りの時間」で意見の交流をしたことを刺激的だと感じた生徒も多かった。

(6) 1、2年生対象 秋休み企業・大学訪問研修



- **実施日** 10月8日、9日（本校の「秋休み」の平日2日間）
- **形態** 1、2年生の希望者が、グローバル課題に取り組む企業と大学を訪問し、学習・インタビューする。午前または午後の2～3時間。各グループに教員1名が、最寄駅から引率した。
- **ねらい** 1年生はこれまで特別授業や講演で聴いたテーマが、2年生は「探究」で研究しているテーマが、実際に現場でどう取り組まれているのかを知り、今後の研究に生かす。
- **実施の詳細** 訪問先は次の9企業、1大学。（ ）内はテーマ。
 - ・ 日本写真印刷 (グローバルな労働・環境基準に適合したものづくり)
 - ・ 岡本無線電機 (LRTによる街づくり)
 - ・ ノーリツ (CO2の排出を削減する製品開発)
 - ・ 大阪ガス (生物多様性を守る活動)
 - ・ 中西金属工業 (女性活躍推進プロジェクト)
 - ・ 江坂-起業家支援センター (精神障害者の雇用と起業支援)
 - ・ トラベル・フロンティア (東南アジア貧困層へのボランティア体験ツアー)
 - ・ ヒロコーヒー (サステイナブル(持続可能な)コーヒーの取り扱い)
 - ・ 日新産商 (環境に配慮した商品の開発)
 - ・ 関西学院大学 (国際協力にあたり大切なこと+体験談)

■ 生徒たちの感想

- ・ 私の探究のテーマは待機児童問題だ。中西金属工業には、私たちが考えた、社内託児所をつくるという改善策が実現されていたので驚いた。実際に見せてもらうこともできた。他にも、女性が働きやすい環境をつくるために工夫した点や女性社員の生の声を聞くことができ、インターネットで調べるだけではわからないことも学べた。探究の授業で生かしていきたい。(2年生)
- ・ 現在生産されているコーヒーのほとんどは熱帯雨林の伐採によるものだそうだ。しかし、レインフォレスト・アライアンスというNGO団体の活動により、環境を保全するコーヒーの生産が増えている。現在、欧米ではそのようなコーヒーが支持されているが、日本ではまだ安いものが求められる。ゆえに、損得にこだわらず環境保全を第一に考える社会の形成が、私達の課題であると思う。(1年生・訪問先:ヒロコーヒー)
- ・ 私とあまり年が変わらない先輩方が世界の発展途上国に行き、ボランティアとして活躍しているという事実を知って、改めて私にも何かできないかを考えるようになった。欧米だけではなく世界全体で起こっていることに興味を持つ必要性を強く感じた。(1年生・訪問先:関西学院大学)

■ 取組を終えて

- ・ 次年度は、2年生については、課題研究「探究」での研究内容と受け入れいただく企業とのマッチングが今年度以上に良いものになるように指導と調整を行いたい。

(7) 2年生対象 「探究」中間発表会

■ **実施日** 10月21日 (2,3時間目)

■ **形態** 各講座の代表10名が「探究」の中間発表プレゼンテーションを行い、国際文化科2年生全員が聞く。

また、各発表に対しコメンテーターの先生お二人から大きな視野から見た各研究の意味と今後の研究への助言をいただいた。生徒は各発表に対してコメントを書き、発表会全体から得られたことを振り返りとして書いた。

■ **ねらい** この発表への代表選出のための講座内発表会を研究の一つの目標とする。優れた発表からヒントを手に入れる。コメンテーターの助言からも各自の研究の今後の進め方についてヒントを手に入れる。

■ **実施の詳細**

コメンテーターは次のお二人。事前に発表要旨をお送りし、コメントの準備をしていただいた。

- ・榎井 縁 氏 (大阪大学未来戦略機構第五部門未来共生イノベーター博士課程プログラム 特任准教授)
- ・谷口 哲也 氏 (日本写真印刷株式会社 コーポレートコミュニケーション室長)

■ **生徒たちの感想**

- ・調べたことのまとめ方グラフや写真の使い方 (パワーポイントでの) をこうすれば見やすい分かりやすいというのがわかりました。一人一人同じ講座であっても違う色が出ていて面白かった。
- ・原稿をほぼ見ていない人の方が発表に聞き入ることができたから自分も今後そうしようと思った。
- ・研究の進め方はとても勉強になった。また、発表を聞いて、ここがあんまりつながっていないとか、関連性が弱いなど感じた部分もあったので、自分も気をつけながら進めていこうと思った。
- ・同じ講座の発表でもいろんな視点があって面白いと思った。実際に人から聞いた話を用いると説得力が増していると思った。

■ **取組を終えて**

- ・コメンテーターのお二人からは、発表の持つ社会的意義と、研究を広げるためのヒントとなる視点をそれぞれのご経験からの確に指摘、示唆していただいた。
- ・予想以上に、「他の生徒の発表から示唆を得た」という感想が見られた。
- ・発表の前の週にリハーサルを行った。気づいた点を指摘したところ、そこからの数日でかなり発表がレベルアップしていた。指導の機会として重要だと再認識した。

(8) 2年生対象 「探究」講座への大学院生訪問指導



- **実施日** 1回目：10月16日，11月2日，6日， 2回目：1月15日，18日（各2時間）
- **形態** 各講座に1,2名の大学院生が訪問し、論文の個別指導や発表に対する講評を行っていただいた。
論文を事前に送ってアドバイスの準備をしていただいた。
- **ねらい** 普段指導している教員とは違った角度から指摘・評価を受ける。
論文作成に取り組んでいる先輩の立場からアドバイスを受ける。

■ 実施の詳細

- ・関西学院大学高大接続センターが窓口になり、本校の希望の把握、大学院生の募集、連絡事項の伝達、レポートの転送をしていただいた。
- ・10講座に対して、講座の研究件数に合わせて16名を派遣していただいた。
- ・2回とも訪問していただける方を募集していただいたので、2回目は前回の様子がわかった上での指導をしていただけた。

■ 生徒たちの感想

- ・自分たちにはない新しい視点からテーマについて意見をいただいた。
- ・調べている内容だけでなく、書く時の構成などについても教えてもらえた。
- ・自分の知らなかった調べ方を教えてもらうことができた。第三者の立場から話を聞いてよかった。
- ・すべきことが明確になった。悪い点よりもさらに付け足すといい点を教えていただいた。
- ・課題がよく分かっていなかったのので、自分の論文に何が足りていないかを指摘してもらうことで、課題を明確にできた。
- ・今後どのような筋道を立てて研究を進めていくのかということや、研究の進め方を教えてもらえた。
- ・たくさん話を聞いてくださって、いろいろ案をくださった。
- ・論文が見られるサイトを教えもらった。いい視点だと言っていたのが自信になった。

■ 取組を終えて

- ・生徒たちの感想に見られるように、研究の進め方と論文の構成の両面について建設的なアドバイスをしていただくことができた。
- ・指導が多面的になったことで、構成のし直しをする必要が出てくる場合がある。このことを見越した時期の設定と指導の仕方が必要であることがわかった。
- ・生徒のレポートの良い点、不十分な点について指導教員が再認識できた。チームティーチングの利点である。

(9) 1,2年生対象 ニューヨーク研修

■実施日 1月2日～7日

■形態 1,2年生を対象に参加希望者を募り、研修の参加実績と学年別の課題エッセイ（日本語及び英語）の総合評価により10名を選抜して実施した。事前指導と事後指導を各3回行い、学習成果発表会「千里フェスタ」において参加者全員が英語で研修の成果を発表した。

■ねらい より良い社会を作るためにどう人間の『違い』に向き合うべきかを、アメリカの企業・企業への助言者・人権団体・国連機関の取り組み、そして移民の歴史を通して学ぶ

■実施の詳細（主な研修訪問先・講師） ▶次ページから研修内容についての詳細レポートを掲載。

チャイナタウン、ウォール街、グラウンド・ゼロ、

多様性と受容(diversity and inclusion)に関するコンサルタント Tanya Odom 氏

移民の歴史を紹介する Museum Of Chinese in America と Tenement Museum

ADL（アメリカ随一の市民権擁護に取り組む団体）によるワークショップ

コロンビア大学

国連本部

本校卒業生で長く国連で働いておられた沼田隆一氏

マーケティング会社 Ogilvy & Mather の Diversity & Inclusion 部門取締役の Ng 氏

国連グローバルコンパクト本部

■参加生徒たちの感想

- ・自分の進路を国内だけでなく、より広い範囲で考えられるようになりました。
- ・英語以外にもうひとつ他の言語を喋れないといけないと思いました。今高校でスペイン語を勉強していますが、大学になってからも本気で学ぼうと思いました。
- ・一番印象に残ったのは、様々な人種がいることです。ニューヨークでは皆堂々と歩いていて、日本もいつかこのような国になればいいなと思いました。
- ・オギルビー社を訪れ、Diversity と Inclusion についての具体的な活動を聞き、動き出している会社があるんだと、初めて身に染みて感じました。
- ・ダイバーシティの利点をたくさん上げてもらいました。その中で一番残ったのは、視点の多様化でした。
- ・研修を通して、英語が話せることよりも英語を使って何をするか、何を伝えるかが重要だと感じました。
- ・他国からやってきた人々がその国のアイデンティティを持ったままアメリカのニューヨークという都市に暮らしている、ということに気が付きました。
- ・コロンビア大学では、いろいろなタイプの人達と同じ場所で勉強をするなんて、どんなに面白いだろうかと思いました。ぜひ自分もそういった環境でたくさんのことを学びたいと思いました。

■取組を終えて

- ・多様性についての理解を深め、実感し、どう向き合うべきかを学ぶという目的は達成できた。
- ・今回は、課題研究で取り組んでいる国際的な課題についての自分たちの意見や提案を提示し、アメリカにおける状況や、国際的な取り組みとの関係について紹介してもらったり、あるいは提案に対して問題点を指摘したりしてもらおうなど、もう一步踏み込んだ内容の研修ができるように指導・計画していきたい。

ニューヨーク研修 2016.1.2.~7. REPORT

(お願い：できる限り正確に研修内容をご紹介するよう努めました。各講師等に確認を求めたわけではありません。あくまで概略をご理解いただくための参考としてお読みください。)

1月2日 (土)

研修①「ニューヨークの地理と歴史」

▶空港からホテルまでの道中、複数の宗教の墓が同居する共同墓地、ニューヨークの地価高騰のために新たに開発されたクィーンズ地区などを車窓から見学したのち、ブルックリンブリッジの手前の公園地区で小休止し、ロウアーマンハッタンのビル群を見学しました。再度バスに乗り、ブルックリンという地名がオランダの入植者により付けられたものである等の説明を聞きながら、橋を渡りマンハッタン島へ。そしてチャイナタウン経由でウォール街へ。チャイナタウンは拡大を続けており、イタリア人街を飲み込む勢いであるという説明がありました。バスを降りてウォール街を見学。再度バスに乗りグラウンド・ゼロへ。ここでもバスを降り、現場のすぐそばにある消防署の銅版画の前で、多くの消防署員が命を落としたことなどの説明を受けました。



1月3日 (日)

研修②「多様性への洞察と偏見の克服」

▶地球規模での多様性と受容及び教育に関するコンサルタントで、企業の管理職のコーチもしておられる Tanya Odom 氏から以下の内容について研修を受けました。



1)アメリカにはまだなお解決すべき課題がたくさんある。

inclusion はパーティーに呼ぶこと、inclusion は一緒にダンスを踊ることと考えると良い。

2) 人の多様性には目に見えるものと見えないものがある。両方の存在を認識・洞察し、尊重することが、構成員が「受け容れられている」感覚を持つためには必要だ。

3) 多様性の例には以下のようなものがある。宗教 (Goldman Sachs はお祈りのための部屋を用意している)・身体の障害・うつ病を含む精神の障害・トランスジェンダー(男女兼用トイレの復活が試みられ始めている)・収入・言葉の訛り

4) アメリカは多様な人間が構成する VUCA な世界になっているのが現実だ。VUCA とは、Volatility (急速な変化), Uncertainty (将来の予測が容易でないこと), Complexity (予想外の問題が混沌を引き起こすこと) and Ambiguity (不完全な情報が判断を難しくさせること) の頭文字である。

5) Mind full (頭がいっぱい)ではなく、Mindful(心を開き、洞察力を使う時間を取る。スピードを落とし、落ち着いて集中できる状態)が必要である。脳の働きとして、ストレスや複数の仕事をこなそうとすることが、無意識の偏見に作用する。そしてその状態が、Micro-behavior (微細な行動や態度)を作り出す。

6) 無意識の偏見は、メディア、煽動的言動、個人的経験、他者からの影響等によって作られる。カーテンオーディションの例 (オーケストラのオーディションで、カーテンを引きカーペットを敷くことで演奏者の性別がわからないようにすると、女性の採用者が増えた) も示唆的である。

7) 日本に戻ってできることを考えてください。個人、グループ、そして地域のレベルで。

研修③④「中国とヨーロッパからの移民の歴史」

▶午後の研修は2つの博物館のガイド付き見学。

1つ目は、Museum Of Chinese in America。ここでは、中国からの移民がアメリカに来た原因（アヘン戦争による国内の荒廃＋西海岸のゴールドラッシュ）、大陸横断鉄道建設での低賃金の危険な労働、中国人移民排斥法の成立と家族を呼び寄せるための知恵などについて、実物や写真を見ながら、白人の女性から説明を受けました。



2つ目は、Tenement Museum。Tenement とは、都市貧民街の安アパートを指します。19世紀半ばからヨーロッパから新天地を求めて移住した人々が暮らしたアパートが、一部補強され、博物館として公開されているものです。ガイドがアパートを案内しながら実在の家族の暮らしを紹介してくれます。我々一行のガイドは、黒人女性の大学生でした。ゴミや動物の死骸に覆われた通り、水道・電気・トイレのない1DKの室内、大恐慌による大黒柱の失業や失踪の中を互助組織の力を頼りに生き延びた家族の様子（国勢調査の記録と子孫からの聞き取りから構成されている）を学びました。



1月4日（月）

研修⑤「多様性の理解と偏見の根絶のためのワークショップ」

▶ADL（Anti-Defamation League,反ユダヤ主義と全ての偏見と闘う市民権と人間関係の課題に取り組む組織）のガイアナ出身の Nicola Straker さんと両親が韓国人の Erin Lee さんの進行により以下の内容のワークショップ型研修を受けました。



- 1) 自己紹介—名前と私の好きな匂い
- 2) ADL の紹介 1913年に設立。正義と全ての人への平等な扱いを実現するために、保護・調査・教育をしている。
- 3) グループの3つの約束事 Respect (active listening), One mic (one person speak at a time), Participation の確認
- 4) Birthday timeline 言葉を使わないで誕生日順に並ぶ。
- 5) The Diversity Iceberg Model 見える違いは氷山の一角。見える違い、見えない違いには何かがあるか挙げてみよう。
- 6) 4本のカラーモールで自分のアイデンティティを表現する。→言葉で説明する。→一番大切な一つを外して隠す→どんな感じがする？→一番大切な自分を隠さなければいけないとするとどんな気持ちになるかを想像する。
- 7) 固定観念・偏見・差別：
 - Stereotype=oversimplified idea ex.) All ~ are ….
 - Prejudice=attitude which comes from family, friends, media…
 - Discrimination=Action
- 8) 固定観念と偏見について考えさせられる短編ビデオの視聴とコメントの共有
- 9) 質問：グローバルな社会におけるリーダーにとって、固定観念に対する理解はなぜ重要だろうか？目の前で偏見に基づく行動があった時、どんな反応をすることができるか？
- 10) ふりかえりのワークシート：学んだことを3つ、将来自分が使うと思うことを2つ、まだ解決していない疑問点を1つ書いてください。

研修⑥「国連各理事会・総会の会場見学と役割の理解」

▶安全保障理事会・経済社会理事会・信託統治理事会・総会の各会議場を見学し、説明を聞きました。通常兵器の展示では、地雷が1個数百円で作られるが撤去にはその約100倍の費用がかかるとの説明がありました。大量殺戮兵器のコーナーでは、広島・長崎への原爆についての展示がありました。また、世界の軍事費総額に対してどれほど国連への拠出金が少ないかのグラフも印象的でした。



研修⑦「国連で働くということ、海外で働くということ、文化の違いを乗り越え楽しむこと」

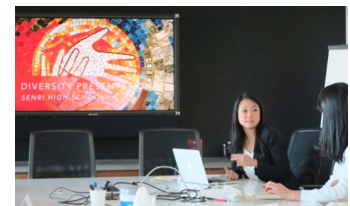
▶国連見学の後は本校の卒業生で、長く国連で働いておられた沼田隆一さんのお宅を訪問しました。

海外では阿吽の呼吸は通じないので口に出して表現することが大切だということ、その人の国のことを調べておいて話題にすることでその人との距離がぐっと縮まること、そうやって壁を越えると、知らなかった世界が目の前に開かれること、南スーダンでは調達担当として宿営地の選定から全車両用のガソリンの買い付け、各国の兵士に合わせた食料の手配までされたこと、国際的な舞台では「青白き秀才」ではなく、「たくましき秀才」が求められていることなどを話されました。



1月5日(火)

研修⑧「企業における多様性尊重の取り組みの実際」▶Ogilvy & Mather 社 Diversity & Inclusion 部門の Transformation 担当取締役で共同経営者である Melissa Ng 氏が研修を準備してくださいました。この会社は世界126か国に500以上のオフィスを持つ世界最大のマーケティング会社の一つです。



研修の主な内容は以下の通りです。

- 1) <Diversity & Inclusion のメリット> 「多様性と受容」と聞くと怖がる経営者がいるが、実際は企業に大きな恩恵をもたらす。創造性を増大させるので、より良い立案ができ、リスクを避けることができる。労働者が「しっくりくる」感覚を持っているので、離職者が減り、優秀な人材が集まる。社内のネットワーキンググループの果たす役割が大きい。多様な社内横断的なグループが張り巡らされることで、より多くの市場を獲得し、組織としての適応能力が高まり、提供できるサービスの幅が広がり、多様なアイデアと経験を活かして多角的な検討ができ、誇りを持ちリラックスし、自分の仕事を認められる環境により効果的な業務の遂行がなされる。
- 2) <課題> 2020年までにアメリカの労働者の40%がヒスパニック系になると予想されている。世界は変化している。コミュニケーションが不足すると、「声を聞いてもらえていない」人が生まれることになる。それではダメで、気づかず自動的にしてしまう「無意識の偏見」を明るみに出し、特性もその人の一部なのだと思える労働環境を作らなくてはならない。無意識の偏見への気づき・客観的なデータ・共に働くためのスキルをトレーニングで提供し、オープンな心構えを保てる(keep mind-set open) 職場にすることが必要なのだ。
- 3) <解決のための方策> 前述の社内のネットワーキンググループが当社での solution だ。各グループは、現状をどう変えるかを考え、調査し、レポートを公表する。
- 4) 私から皆さんへの宿題は、日本に戻った翌日からのアクションプランを立てることだ。個人レベル、学校レベル、家庭レベルで何をいつまでにどのようにやるのかを書いて欲しい。

研修⑨「国連グローバルコンパクト本部の役割と女性の就労に関する取り組み」 ▶ 3人の方が説明をしてくださいました。



人権と法律及び政策部門長の Shubha Chandra さんは、国連グローバルコンパクトが作られた経緯と、この枠組みと国連のミレニアム開発目標(Millennium Development Goals) 及び昨年国連総会で採択された持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals) と

の関係について話されました。これらの目標は企業の責務を確認するリストであるとともに、ビジネスチャンスでもあると強調されていました。

また、この本部の役割は、このような国連の決定内容を、国連の関連機関（国際労働機関や国連ウィミンなど）と連絡を取りながら、各地域のグローバルコンパクト署名団体が共有する手助けをしたり、各地での取り組みを集約して必要とする団体に有効な手段として提供したりすることであると話されました。地域によって課題や事情が異なるため、本部が主導するのではなく、地域ごとのネットワークが地域の NGO と協力して動くことが重要であるということもわかりました。

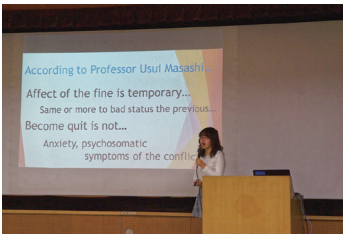
女性のエンパワメント担当調整官の Tulsi Byrne さんは、2010年に作成された Women's Empowerment Principles (WEPs 女性のエンパワーメント原則)を紹介されました。女性にとっての問題状況（意思決定の役割を正當に与えられていない、同一労働でも賃金が低い、暴力的／性的虐待を受けている、職業・教育・訓練・職能開発において同等の機会が与えられていない、経済的に不利にされていてビジネスの競争に参加する機会が平等に与えられていない等）を整理して示し、逆に女性への処遇を改善すればどれほどビジネスの進展につながるかを紹介してくださいました。

最後は、管理及び社会的持続可能性部門の長であり、この本部の顧問である Ursula Wynhoven さんが、日本の女性の労働環境について質問をされました。日本では父親も育児休暇を取ることが法律上は可能になっているものの、男性の育休取得は難しいということを伝え、興味を持ってこちらの話聞き、アメリカでも男性の取得者は少ない、北欧は進んでいることなどを紹介してくださいました。参加生徒からの、利益につながらないと思われる労働環境整備を企業はどう位置付けているのかといった質問にも丁寧に答えられ、いつでも意見や質問を歓迎すると言っていました。

1月6日(水)

空港へ向かうバスの中で、生徒と引率教員全員が振り返りのスピーチをしました。それまで毎日の振り返りは Google Classroom のシステムを使って個別に提出してもらっていたので、感じたことを交流するいい機会になりました。

(10) 1,2年生対象 学習成果発表会「千里フェスタ」



代表発表



探究プレゼン



探究セッション

■実施日 2月9日, 10日, 12日

■形態 1,2年生を対象に、1日目は、音楽の発表と基調講演、学年別活動、2日目は、課題研究「探究」・「探究基礎」・「科学探究」・「科学探究基礎」の発表、及び「SGH海外研修」・「SSH海外研修」の発表等を分科会形式で、3日目は、2日目とほぼ同内容を一般に公開して行った。3日目は、1年生の日本語でのディベート、2年生の英語でのディベートが加わる。

- ① 「探究」の発表:代表発表・探究プレゼン・探究セッション
- ② 口頭発表でのタブレットの活用
- ③ 探究基礎:ディベートと第3のアイデア
- ④ 基調講演とドキュメンタリー映画上映会 について紹介する。

① 「探究」の発表:代表発表・探究プレゼン・探究セッション

■形態 講座内発表の評価により、各講座から「代表発表」をする1名(組)・「探究プレゼン」をする3名(組)を選出し、その他の生徒は「探究セッション」形式で口頭発表する。

■ねらい 課題研究を、聞き手を意識した質の高いものにする動機を与える。

研究成果を共有することで刺激を受け、意見の交流を楽しむ。

■実施の詳細

- ・「代表発表」の生徒は、大教室または図書室で発表し、1日目はコメンテーターからコメントを受ける。
- ・「探究プレゼン」の生徒は、普通教室で発表する。
- ・「探究セッション」の生徒は、普通教室で、前後半分ずつを使い同時に2組が発表する。この形式は、全研究が発表できるようにするため、今年初めて導入した。発表者と聞く生徒との距離が近く、質問や意見を交換しやすくなることも期待した。

■取組を終えて

- ・探究セッションは、隣の発表が気になるのと欠点がある一方、発表者と参加者の距離が近く、独特の雰囲気意見交換もしやすいという長所もあった。2年生は課題研究を全て発表することになりゴールが揃ったのも士気を高める効果があったと感じる。

② 口頭発表でのタブレットの活用



- **形態** 本校では生徒全員がタブレットコンピュータを入学時に購入している。プレゼンテーションを行う際に、タブレットとプロジェクターをワイヤレスで接続して画像を投影した。
- **ねらい** 準備を容易にする。(コンピュータとケーブル(電源・LAN・RGB)が不要になる) 生徒各自がコンピュータなしにデータの修正やリハーサルをすることが可能になる。発表者と聴衆を隔てるものが少なくなり、距離感が近くなる。

■ 実施の詳細

- ・ 会場の設備としては、短焦点プロジェクタと展示ボードを設置する。
- ・ プロジェクタの HDMI 入力端子 (左の赤枠) と USB 出力端子 (右の赤枠) にミラキャスト対応ワイヤレスディスプレイアダプタ (Microsoft P3Q-00009 など) を接続する。
- ・ ミラキャスト対応タブレット (Asus Nexus7 2013 など) とワイヤレスディスプレイアダプタを無線接続し、映像を送る。(音声も送出可能)



プロジェクタ



ワイヤレスディスプレイアダプタ
(Microsoft P3Q-00009)



・ ミラキャスト対応タブレット
(Asus Nexus7 2013)

■ 取組を終えて

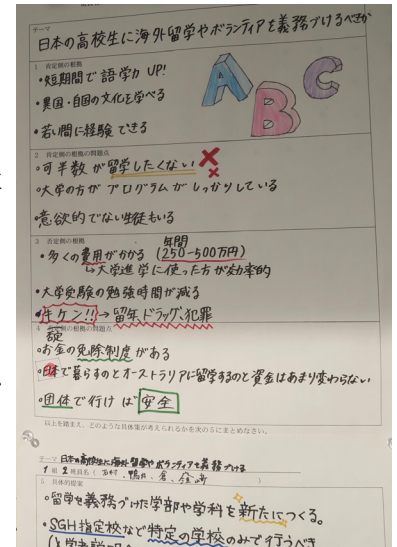
- ・ ねらい通りの効果が得られた。
- ・ ワイヤレス接続の手順など、操作方法を事前に確認する機会を作るなどの準備をすれば、スムーズに進めることができる。

③ 「探究基礎」: ディベートと第3のアイデア

■形態 1年生の課題研究「探究基礎」に関しては、代表班がディベートを発表し、また全員が講座内でのディベート時に考えた「第3のアイデア」をポスター発表した。

■ねらい

- ・優秀班が発表する機会を作ることで、予選に向けて全体の士気を高める。
- ・ディベートで賛成反対両方の立場から課題を検討した後、双方の主張を尊重した解決策「第3のアイデア」の発表の機会を作る。



④ 基調講演とドキュメンタリー映画上映会

■形態 1) 千里フェスタオープニング基調講演として、国連勤務経験者による、グローバルに活躍する人材に必要な資質についての講演会を開いた(1、2年対象)。
2) 1年生対象に、カカオ農園での児童労働の現状・撲滅のための取組・学生の経験を紹介するドキュメンタリー映画を上映した。

■ねらい

- 1) SGH の基本理念・目標を次の学年を迎えるにあたって再確認する。
- 2) 2年生での課題研究への橋渡しとして、自分たちと同世代の若者がどんなことをできるか考え、実行した軌跡を見ることによって、本校生徒が自分たちにも何ができるかを考えるための一助とする。

■実施の詳細 2)について

「国際理解」の授業で、2年時の授業「探究」に向けて、国際的課題を取り扱ってきた。特にガーナのココア農園における児童労働については、以下のように4時間にわたって理解を深めさせてきた。映画「バレンタイン〜掬」の上映を第3回と第4回の間に入れる。

第1回	講義	チョコレートの歴史とココアのサプライチェーンについて
第2回	グループワーク	ガーナのココア農家と日本の家族を体感してみよう
第3回	ビデオ	世界が100人の村だったら 「チョコレートも知らず一生カカオ農園で働き続ける兄弟」
第4回	グループワーク	カカオ生産地における児童労働の問題を改善するために私たちにできること

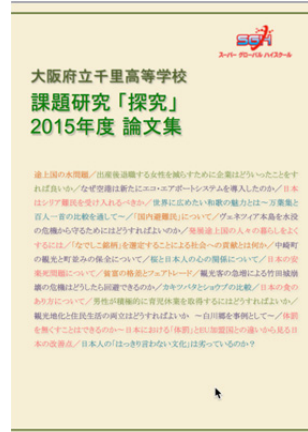
■取組を終えて 2)について

- ・生徒の感想を読むと、授業で予備知識を得てから見たせいもあって、多くの生徒が映画の内容をしっかりと理解している。エキスポシティなどに買い物に行った際にもフェアトレード商品を探してみるなど、身近なものが国際的課題につながっていることを感じてくれている。次年度の「探究」に向けて、大きな問題に対する政策提言だけではなく、自分たちの立ち位置で、何ができるかを考える礎になってくれれば幸いである

(11) 成果の普及

① SGH ホームページ

構想・実践報告・運営に関する記事を英日対訳形式で掲載したホームページを企画・作成した。
 下記②～④の資料も順次このホームページの「活動記録」-「運営」のカテゴリで公開する。



② 実践レポート

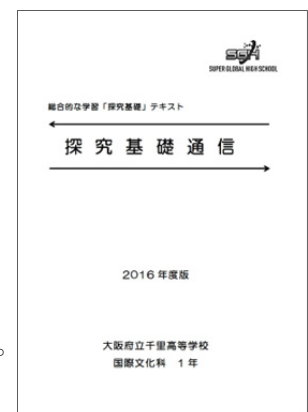
具体的な実践の様子を紹介することを主眼にした冊子『共有と前進のための SGH 研究開発実践レポート 2015』を作成し、SGH 校並びにアソシエイト校に送付した。

③ 論文集

2年生の課題研究の110研究の中から 38 論文を選んで掲載した論文集を作成した。

④ 1年生向け課題研究テキスト

授業で用いたワークシート『探究通信』を冊子にまとめ、テキストを作成した。



(12) SGH 運営指導委員会：助言を中心に

今年度は、10月と2月の2回運営指導委員会を開催し、外部有識者からの助言を受けた。いずれの回も生徒の発表を見ていただいた上での具体的、建設的な助言を受けることができ、勇気付けられるものだった。本校の今後の指導にも、同様の取組をされている他校にも役立つものと思われるので、助言部分を詳しく紹介する。



① 平成27年度 第1回運営指導委員会

日時：平成27年10月21日 11時35分～12時40分／場所：千里高校 校長室

出席者：

運営指導委員

久 隆浩(近畿大学 総合社会学部 環境系専攻 教授)

藤本 英子(京都市立芸術大学 美術学部 教授)

朝田 秀俊(吹田市立竹見台中学校 校長)

岡本 真澄(大阪府教育センター 高等学校教育推進室 主任指導主事)

大阪府教育委員会事務局

平岡 香子(大阪府教育委員会事務局 教育振興室高等学校課教務グループ 主任指導主事)

千里高校

林 伸一校長／堀辺慶一教頭／大西 千尋首席(SGH 事業推進主担当)／松井 活夫教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」主担当)／近澤 一友教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」「国際理解」担当)／野村 真理教諭(「探究」担当)

次第：

校長挨拶・委員紹介・委員長の選出：久委員を委員長に選出

本校のSGH事業の取組状況報告：1) 構想の骨子 2) 実施状況と今後の予定 3) 現在の課題

指導助言(主な内容)

- 地域の課題は地域で解決していかないと持続可能性を担保していくことができない。支援の仕方でも幾つかの切り口がある。国際機関でプログラムを作る形の支援もあるし、NGO、NPOのように地域に入り込んで個別課題を解決していくという切り口もある。NGOにはNGOのネットワークがある。
- 労働法などの政策提案ではなく、高校生でも明日からでもできるような提案に探究を近づけていけば、実感のある提案ができる。
- グローバルな視点で将来活躍していくような高校生が社会人になるのは、頼もしいと思うと同時に、地元の課題に対して草の根レベルでの視点も持てるようなグローバル人材が育てて欲しい。
- 国際問題と同じ構図がローカルにある。まずそこをトレーニングの場所として使わせていただきながら、解決をするということをやれば、そこで能力アップが図れ、それが国際的にどう通用するかという所に結びつけていくこともできる。海外に行かなくても取り組み、地域問題を解決するという貢献にもなる。そういう両輪でいくのも一つの手である。

- グローバルな課題の現場に研修に行くのも一つの方法だ。現場を経験することによって心が成長するし自分が置かれている立場がよく分かる。これにより提携先が広がる可能性もある。地域課題に取り組む NGO とタイアップするのも一つの手である。
- スーパーグローバル事業は国際的な問題、そして国際的なビジネス課題を高校生の立場で、企業・大学と連携しながらどのように解決していくかという研究テーマがあって、それに応えて千里高校の構想は立案されている。構想の主要な柱をグローバルコンパクトにしていることを活かしつつ、どう広げて肉付けしていくかということになる。「グローバル」という考え方は重視すべき方向である。生徒の研究を深める方法の一つとして急がずに検討されると良い。
- 企業や大学とのマッチングは、初めからうまくいくものではない。今後連携されていく企業それぞれの強みが見えてくる。また、大学との連携については、研究のテーマよりも研究の作法を教わることに重点を置くと良い。関係が深まればまた繋がりもできる。
- グローバルコンパクトの中で起こっている問題が実際に現地ではどのように見えているのかを現地に行ってみよう、という目的で途上国に行くというやり方もある。そしてそこがビジネスにつながっていくかもしれない、というシナリオ作りもできる。
- 運営委員会だけではなくて随時委員と連絡を取っていただければ、サポートさせていただきたい。

② 平成27年度 第2回運営指導委員会

日時:平成28年2月10日 11時40分～12時30分/場所:千里高校 校長室

出席者:

運営指導委員

久 隆浩(近畿大学 総合社会学部 環境系専攻 教授)

藤本 英子(京都市立芸術大学 美術学部 教授)

大阪府教育委員会事務局

池嶋 伸晃 大阪府教育委員会事務局 教育振興室高等学校課 総括主任指導主事

千里高校

林 伸一校長/堀辺慶一教頭/大西 千尋首席(SGH 事業推進主担当)/松井 活夫教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」主担当)/近澤 一友教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」「国際理解」担当)/野村 真理教諭(「探究」担当)/二井三喜夫教諭(「探究」担当)/芦田 健教諭(「探究」担当)/前橋 直子教諭(「探究」担当)

次第:

- 1, 校長挨拶
- 2, 本校の SGH 事業の取組状況報告
 - 1) 実施状況:前回の運営指導委員会以降の取組について報告
 - 2) 来年度の実施計画:来年度の実施計画の方針について報告
 - 3) 評価の中間報告:評価指標に関わる実績・理解度・意識調査の結果・目標設定シート達成度の概要を報告

3, 指導助言(主な内容)

<地域課題について>

委員:千里高校ではどういふグローバル人材を作ろうとするのかについて改めて共有する必要がある。都市開発やまちづくりの現場では、日本にある技術を海外に持っていくということがとても多い。これに対して、国連職員はコーディネイトする人材だ。質が違い、必要な素養も違う。起業をするという観点でいえば、グローバルな問題だけではなく、身近な所で起こっている社会のニーズを的確に捉えてそれにユニークな解決方法を載せていく能力が必要とされる。それができれば世界中のどこに行っても社会貢献ができる。目指すべき方向性が複数あって良い。そこをうまく整理しながら統一性を図っていくのがいいと思う。

委員:私も是非地域課題の解決に立脚してやっていていただきたい。地域の問題は世界の問題に必ず繋がっている。会社の経営の話だと高校生が取組んでも聞いたことを発表しましたという感じになり、もったいない。

<グループワークについて>

委員:ぜひ、グループとして活動すると、こんなに面白く、こんなに発展するんだという体験をこの世代でして欲しい。特に、課題発見のところで、ディスカッションしていくと面白いし、多様なものが出てくると思う。そういうことを初期に、「地域のことを考える」というテーマで体験してもらえたらと思った。それには市議会や府議会を見に行くと良い。また、探究した後、どういふ形で提案していけばいいかを考える場面でのグループワークは意味がある。

<フューチャーセンターについて>

委員:こういう工夫としてフューチャーセンターというスペースを作った高校がある。みんなが集まってきてアイデアを出していく場所や雰囲気を作っていくやり方だ。面白いのは、単に集まって話をするだけではなくて、生徒のモチベーションが上がってきて学力もアップしてきた。ただ、そういう発想ややり方と探究は少しベクトルが違うので、これは整理しておかないといけない。

委員:フューチャーセンターは、ブレインストーミングのワークショップだ。アイデアを出しあいながら、PostIt を貼りながら発展させていく。常にそういうことができるスペースだ。さらにどこかのグループがやった成果を壁に貼っておく、そこを通った生徒がこんな議論があったのだと知って自分の感じたことを書き込む。こういうことができるスペースを校舎の一角に作った。アイデアを貼れるように、ホワイトボードやコルクボードを用意してある。人が通って見られるようなオープンスペースがいい。

委員:私も関西フューチャーセンターのメンバーだ。そこで活動しているグループがあるので、声掛けをすれば、ノウハウを持った人たちの協力が得られる。

委員:探究のような授業や、学校で起こっている問題をどう解決していくかといったワークもしている。

委員:協力している NPO の人が常駐している。文科省から補助金をもらっている。必ずしも常駐は必要ないが、いると、アドバイスができる。

<本校の今年度の探究講座でのグループワークについて>

教員:テーマ設定のところ、広げるのに必要だったかなと思う。1年の段階であると良いと思う。

教員:1、2年両方を担当している。1年の後半では、明らかにそれを意図して指導計画担当の先生が計画を組んでおられた。今のお話とほぼ合致する。まず、主題であるグローバルコンパクトに関して、あなたならどんなことを考えますかということを書かせて、その後タブレットで調べさせて、とにかく疑問を

持ち寄って疑問のペーパーを回し読みして、その中で誰のが一番興味深かったのかをグループで投票して、それをみんなで意見を出し合いながら深めていこうという手順だった。次年度以降さらにステップアップしていけるように思う。

教員:私の講座は最初グループから始まって、グループごとに別々の国に現在派遣されている青年海外協力隊の人とコンタクトをとって、その国の情報を知る中でそれぞれ問題点を考えさせ、プレゼンにまとめることを最初にやった。その中からテーマを見つけるというのを基本にした。違うテーマに行った生徒もいたが、今回発表したうちの何人かはそこからさらに深めてという形になっているので、取り掛かりはグループで始まったと思う。

教員:私の場合はグループワークを導入の際にテーマ設定に利用した。本校の探究は従来 4000 字のレポートを最後に仕上げるということをゴールの一つにしている。だから、最終的には個人の研究をすることになる。テーマ設定の所でできていたグループから、最終的には一人一人別々の課題を選んで行っている。どこかで同じようなテーマの生徒が集まってアイデアを出し合ってたまた個人に持ち帰ってということがあったらよかったとお話を聞いて思った。

教員:私の講座は、個人とグループを繰り返して何度かやった。初めはバラバラの花を選んだりしたが、グループにしたら同じ花が面白くなったり、一緒にやることで全然違う花に興味を持ったりしていた。でも違う活動をやっていても帰ってくる所は似ていて、探究活動としては割とうまく行ったかなと思っている。

<その他のアドバイス>

委員:今後の連携先に関して、情報提供を兼ねて話をしたい。先ほど JICA の話が出たが、これはやはり北大阪のメリットだと思う。これを生かすのは千里高校の特長になると思う。国連の機関でも日本国内にいくつかある。一つが、UNCRD 国連地域開発センター。これは名古屋に本部がある。このような所とコラボすると、費用がかからずに年に何度もいろいろ情報交換できる。また、国連環境計画の国際環境技術センター (UNEP/IETC) が大阪の鶴見緑地と天津の烏丸半島にある。こういう所ともコラボすれば密に連携が取れる。地域でグローバル NPO をまとめている関西国際交流団体協議会がある。百数十団体のネットワーク組織だ。効率的に大阪にある国際交流団体とネットワークが作れる。

委員:卒業生でもいろいろな所で関わっている人がいると思うので、スムーズにネットワークを作ることができればいいと思った。課題を学校内で抱えるのではなくて、情報収集の面では外に助けを求めると良い。身近にも無料で使えたり、交流を持ったりする所もあるはず。ぜひ学生たちにリアルな体験、生の話を聞く機会を加えていくといいと思う。

Ⅲ. (資料) 国際文化科今年度入学生の教育課程表

平成27年度大阪府立千里高等学校 国際文化科 教育課程(49期生)

(入学年度別、類型別、教科・科目等単位数)

入学年度 学年		H27 (2015)										計	備 考	
教科	科目	Ⅰ 年				Ⅱ 年		Ⅲ 年						
		共通	選択	前期	後期	共通	選択	共通	選択	前期	後期			
国語	国語総合	5											13~17	
	現代文B					2		2						
	古典B					2		2						
	(学)現代文演習									+1	+1			
地理歴史	(学)古典演習									+1	+1		4~8	
	世界史A					2								
	世界史B							*2						
	日本史A					*2								
	日本史B							*2						
	地理A					*2								
	地理B							*2						
	(学)世界史演習									+1	+1			
(学)日本史演習									+1	+1				
公民	(学)地理演習									+1	+1		2~6	
	現代社会	2												
	倫理									+1	+1			
数学	政治・経済							*2					11~15	
	(学)政治経済演習									+1	+1			
	現代文	3												
	数学Ⅱ					3								
	数学A	2												
	数学B					3								
理科	(学)数学ⅡB演習									+1	+1		7~20	
	(学)数学演習									+1	+1			
	物理基礎					△3								
	化学基礎	2						#3		◇2				
	生物基礎					△3					+2	+2		
	地学基礎	2												
	(学)理科演習									+1	+1			
体育	(学)化学演習									+1	+1		10	
	(学)生物演習									+1	+1			
芸術	体育	3				2		3					2~6	
	保健	1				1								
	音・美・書Ⅰ	2						#2						
外国語	音・美・書Ⅱ									+1	+1		0	
	音・美・書Ⅲ													
家庭	家庭基礎	2											2~3	
情報	(学)生活科学					#1							2	
英語	社会と情報			1		1							2	
	総合英	5											15~23	
	異文化理解					2		3						
	時事英語							◇2						
	(学)トピック・スタディズ					2		2		◇2				
	(学)ライティング・スキルズ										+1	+1		
	(学)リーディング・スキルズ										+1	+1		
(学)LL速読演習					1									
国際文化	(学)英語語法演習									+1	+1		6~10	「(学)英語以外の外国語研究」は、中国語、韓国・朝鮮語、フランス語、ドイツ語、スペイン語から選択
	(学)グローバル・スタディズ							◇2		◇2				
家庭	(学)英語以外の外国語研究							◇2		◇2			0~2	
教科・科目の計	(学)グローバル・コミュニケーション	2				2		2					0~2	
	(学)国際理解							◇2		◇2			+1	+1
教科・科目の計		31	0	1	0	28	5	16	2	7	4~7		94~97	
ホームルーム活動				1		1				1			3	
総合的な学習の時間				2		1				0			3	国際理解(1年)、探究基礎(1年後期)、探究(2年)、志学
総 計				35		35		30~33					100~103	
選択の方法		2年、*から1科目2単位、△から3単位、#から3単位 ◇から1科目2単位 3年、*から1科目2単位、◇から2単位。 選択群から前期7単位、後期4~7単位選択												

